

# 外国人留学生と日本人学生間における協働プロジェクトワーク

## —— 4年間の実践を踏まえての今後の課題 ——

澤 邊 裕 子<sup>1</sup>・安 井 朱 美<sup>2</sup>

### 1. 協働プロジェクトワークとは

近年、日本語教育の現場においては学習者の自律的な学習を導き出すために、「学び方を学ぶ」工夫として協働的な学習活動が注目されている。この背景には日本語教育における言語教育観の変化、すなわち「教師がどう効率的かつ効果的に教えるか」という教師主導の考え方から、「どのようにしたら学習者の学びたいことを引き出し、学習者の自律的な学習を支援することができるか」という学習者主体の学習を重視する教育観への変化があると言える（池田・館岡2007）。

プロジェクトワーク（以下、PWとする）とは学習者が自分達で話し合っ  
て計画をたて、実際に教室の外で日本語を使ってインタビューや資料集め、情報集めなどの作業を行い、作業の結果を持ち寄って一つの制作品（報告書、発表、ビデオなど）にまとめる学習活動（バルタン田中他1988）のことで、「調査発表への学習意欲を喚起することによって学習成果を高め、この学習成果がさらなる日本語学習への肯定的態度をもたらす」（倉八1994:136）とされる。留学生を対象としたPWの報告例は、稲葉（1994）、田中（2000）、梅田（2006）など数多く見られる。一方、留学生と日本人が合同でPWを行なった例として、板倉（2001）が挙げられるが、これらはすべて比較的長期間に渡り行なわれたものばかりである。

宮城県仙台市にあるM大学と愛知県名古屋市にあるN大学では、2008年から2011年までの間、1年に一度日本語教育を学ぶ日本人学生（以下、JSとする）と日本語を学ぶ外国人留学生（以下、FSとする）との間で短期間の協働プロジェクトワークを実践してきた。本稿の目的は、4回に渡る協働PWの結

#### 【注】

<sup>1</sup>宮城学院女子大学

<sup>2</sup>南山大学外国人留学生別科

果を「協働学習」という視点からまとめ、今後の協働PWデザインにあたっての課題を述べることである。日本語教育におけるPWの実践例は多いが、ある1大学の内部で、そして学期単位などの長期間にわたり行なわれることが多く、地理的に離れた2つの大学による協働プロジェクトワークの実践例は少ない。このことから、本報告は短期間の協働PWをデザインする際に一実践例として活用できるものと思われる。

協働の概念について、池田（2007）<sup>3</sup>は「対等：対等な関係（差異の尊重）」、「対話：対話を手段とする」、「創造：創造を目指す」、「（対話の）プロセス：共同構築過程」、「互恵性：互いに意味のある」という5つのキーワードを挙げています。これまで実施してきたPWは以下の点で「協働学習」の一形態であると考えた。

表1 協働学習の概念と本PWにおける根拠

概念	本PWにおける根拠
対等	JSとFSがほぼ半々のメンバーで構成され、JS、FSともに果たすべき役割がある。JSまたはFSのどちらかが優位に立つ活動ではないが、JSは日本語のネイティブスピーカーとして、発表準備の際、ネイティブ・チェックの役割をより期待され、FSは土地の利を生かしてJSをリードすることが期待される。
対話	本PWはグループのメンバー間による対話とそれに基づく実地調査により遂行される。
創造	本PWはそれぞれのグループが自ら調査し、発見したことをもとに、オリジナリティーのある発表を行うことがゴールとなる。
プロセス	計画段階から調査、発表準備など一連のPWの作業は、メンバー全員が関わり、共同による成果発表がなされる。
互恵性	日本語・日本文化を学びに来日している外国人留学生と日本語教育を学ぶ日本人学生の双方にとって、学びを深めるチャンスとなる。

【注】

<sup>3</sup>池田・館岡（2007）の第一章（池田玲子氏執筆部分）による。

## 2. 参加者の背景

参加したJSは2008年12名、2009年14名、2010年14名、2011年14名の合計64名で、1年間日本語教育関連の授業を履修した2年生または3年生が参加している。M大学に在籍している留学生は非常に少ないため、JSが普段留学生と接する機会は極めて少ない。本協働PWは日本語教育演習履修生を対象として行われる名古屋研修旅行のメインとなる活動である。名古屋研修旅行は4泊5日の日程で行われ、一日目は仙台から名古屋への移動及びオリエンテーション、二日目から四日目が協働PW、最終日の五日目が自由行動となっている。一方、FSの参加者は2008年17名<sup>4</sup>、2009年21名<sup>5</sup>、2010年20名<sup>6</sup>、2011年16名<sup>7</sup>の合計74名である。ほぼ全員が1年間日本に滞在予定の交換留学生で、ホームステイまたは大学の寮に住んでいる。日本語力は中上級レベルであり、平日の午前中は基本的には留学生のみで日本語を学習している。

### 【注】

<sup>4</sup>国籍(地域)は、アメリカ11名及びオランダ、セルビア、ラトビア、インドネシア、中国、台湾が各1名ずつである。

<sup>5</sup>国籍(地域)はアメリカ9名、中国4名、台湾2名、インドネシア、韓国、タイ、イギリス、コロンビア、ドイツが各1名ずつである。

<sup>6</sup>国籍(地域)はアメリカ9名、イギリス3名、ベトナム2名、タイ2名、フィリピン、韓国、インドネシア、中国各1名ずつである。

<sup>7</sup>国籍はアメリカ6名、中国3名、タイ2名、イギリス、インドネシア、ベトナム、シンガポール、チェコが各1名ずつである。

## 3. 協働プロジェクトワークの実施概要

### 3. 1 PWのテーマ

2008年から2011年までのPWテーマと概要は以下の通りである。PWのテーマは主に名古屋文化を中心として設定した。JS、FS、双方にとって自分の所属文化との比較がしやすく、日本についての理解が深まると期待したからである。

#### ○2008年 名古屋文化プロジェクト

「名古屋弁」「モーニングサービス」「名古屋駅周辺の再開発事業」「名古

屋の交通システム」「名古屋嬢」「大須」といった名古屋の文化について JS、FS混合の6つのグループがそれぞれ論点を設定し、実地調査し、その結果を発表する。

○2009年 名古屋文化インタビュープロジェクト

7つのグループに分かれ、「名古屋の婚礼」「名古屋の食文化」「在日外国人」「名古屋の祭」「名古屋の多文化共生」「名古屋のスポーツ」「名古屋の観光」という7つの名古屋の文化について、それぞれ詳しい専門家のところにインタビューに訪れ、その結果を発表する。

○2010年 日本の教育プロジェクト

名古屋市内のプレスクール、中学校、高校を訪れ、体験してきたことをもとに、教育事情についての発見を出身国、出身県の教育事情と比較して発表する。

○2011年 名古屋の街探訪プロジェクト

「名古屋駅」「大須」「栄」「池上」など名古屋市内の様々なスポットを訪れ、実際に自分の足で発見してきたことについて発表する。

### 3. 2 各年に共通するPWの流れ

PWはM大学のJSがN大学を訪問する形で実施されたが、訪問する前に事前作業も行っている。まず、自己紹介書及び写真を送りあい、自分のグループのメンバーについて知ることができるようにした。またJSがテーマに関する事前の調査を主にインターネットを通じて行い、計画書を作成し、M大学側に郵送した。受け取ったFS側はそれらを見て確認したり疑問点をコメントにして送ったりするなどの事前作業を行った。

PWの前日に集まれるメンバーによる顔合わせを行い、PW一日目の午前中に調査の計画書に従って具体的な方法を打ち合わせする。自己紹介を行った後、3日間、一緒に活動するメンバーの間での意見交換が活発になされるよう、話し合いの雰囲気作りのためにブレインストーミング促進用カードゲームを用いてPWを成功させるためにはどうしたらよいか、アイデアを出し合う時間を設けた。午後、グループごと訪問先に分かれて移動し、調査活動を行った。

PWの二日目は終日発表の準備作業を行った。2010年はポスター発表の形式で行ったため、ポスターを作成した。他の年は全てパワーポイントを使っての発表形式を取ったため、調べてきた内容をパワーポイントに構成する作業

を行った。発表はメンバー全員が行うこと、授業で習った日本語の表現を随所に入れて発表スクリプトを用意することが共通して与えられた条件であった。

PWの三日目は調査の結果の発表会である。一グループ15分程度で内容をまとめ、発表した後、聴衆からの質問に答える質疑応答の時間も設けられた。その後、PW全体に関するアンケートを実施し、午後にはPWにおける自分のグループ及び自分自身の活動を振り返るインタビューの時間を設けJSとFSに分かれて実施した。

### 3. 3 各年の変更点

#### (1) 2008年から2009年

2008年PWは名古屋文化小テーマに基づく調査方法は各グループに委ねられていた。施設を訪れてパンフレットをもらってきたグループ、関係する人を訪問してインタビューをしてきたグループなど、資料の収集方法や調査にかける時間も様々であり、グループ間の差異が際立って見えた。それを踏まえ、2009年PWでは全てのグループにテーマ関係者、専門家に対するインタビューを実施する「インタビュープロジェクト」を行うこととした。インタビュープロジェクトの利点は、参加者同士の対話だけでなく、名古屋文化の各テーマに関する専門家の生の声を聞く、という形態を取ることで、より丁寧な失礼のない話し方の実際を体験するという点がある。また、必要な情報をしっかり収集し、それらを必要に応じて要約して発表するなどの技術を学ぶことができることも利点であると考えた。

#### (2) 2009年から2010年

インタビュープロジェクトは(1)で述べた利点を備えていたが、調査に行く範囲が広く、移動に時間がかかる、インタビューに協力していただく専門家の方の都合とPWの日程が必ずしも合わないという物理的な課題を残した。そのため、2010年PWは「インタビュー」を取り入れるという調査方法はそのまま残し、テーマを「日本の教育」とし、各グループがリサーチ小テーマを持って、近隣の中学校、高校、インターナショナルスクールなどの学校教育現場を実際に訪問し、授業見学と生徒や教師に対するインタビューを通して、リサーチテーマについて考察するという内容に変更した。テーマを「日

本の教育」としたのは、大部分のFSは母国からの交換留学生であるため日本の教育に興味があり、かつ自国との比較がしやすい上、JSにとっても得るものがあると考えたからである。なお、2010年PWではポスター発表の形態を取った。これはこれまでパワーポイントを使用しての発表形式からの実験的な変更であった。なお、ポスター発表はパワーポイントを用いての発表に比べて発表者と聴衆の距離が近く、質問やコメントがしやすいという利点がある。

### (3) 2010年から2011年

2011年PWのテーマは「名古屋の街探訪プロジェクト」とした。FSにとって名古屋は生活の地であるが、訪れたことのない場所や、行ったことがあっても詳しくは知らないという場所がある。また、JSにとっては日本人であっても遠く離れた名古屋はほとんど未知の場所であり、「名古屋の街を訪れて、自分の足で街の特徴やおもしろいところを発見し、それを発表の場においてPRする」というタスクは、JSの最終日の自由行動の計画作りにも繋がり、JS、FSのモチベーションを高めやすいのではないかと考えた。その他に2010年PWからの変更は、特定の人に対するインタビュー活動を行わなかった点と、パワーポイントの発表形式に戻した点である。街の施設を訪れたり、店に入って店の人から情報収集をしたり、街を訪れている人たちにインタビューをしたりするなど調査の方法は様々である。また、街の様子を静止画、動画でよりリアルに聴衆に伝えるためにパワーポイントの方が発表しやすいと考えた。

表2 各年のPWのまとめ

	2008	2009	2010	2011
研修期間	2.19～23	2.17～21	2.16～20	2.15～19
PWテーマ	名古屋文化プロジェクト	名古屋文化インタビュープロジェクト	日本の教育プロジェクト	名古屋の街探訪プロジェクト
参加者(JS)	12名	14名	14名	14名
参加者(FS)	17名	21名	20名	16名
活動の流れ	計画書作成(事前) ↓ 打ち合わせ／ 実地調査 ↓ 発表準備 ↓ 発表(PPT)	計画書作成(事前) ↓ 打ち合わせ／ インタビュー 調査 ↓ 発表準備 ↓ 発表(PPT)	計画書作成(事前) ↓ 打ち合わせ／ 学校訪問+イン タビュー ↓ 発表準備 ↓ ポスター発表	計画書作成(事前) ↓ 打ち合わせ／ 実地調査 ↓ 発表準備 ↓ 発表(PPT)
次年度への課題	調査方法も学生に委ねられたため、グループ間の成果の差異が目立ったこと。	インタビュー協力者とPWの日程が必ずしも合わない、移動時間がかかるなどの物理的な問題。	名古屋という場所の特性が十分に活かされていないこと。	街の紹介、PRが目的であるため、深い考察が伴わないこと。

### 3. 4 参加者アンケートの結果

PW全般に関するアンケート調査の平均値結果を以下の表に示す。1＝全くそう思わない、2＝あまりそう思わない、3＝どちらともいえない、4＝そう思う、5＝非常にそう思う、の5段階評価の平均値を示したものである。

表3 JS(日本人学生)の結果

	2008	2009	2010	2011	平均
FSと一緒にできたPWは楽しかった	4.58	4.57	4.71	4.71	4.64
いつもの授業とは異なることが学べた	4.92	4.86	5.00	4.64	4.86
FSから学ぶことがあった	4.75	4.86	4.92	4.64	4.80
短い期間だったが、できる限りの準備をして発表できた	4.00	3.50	4.07	3.71	3.82
他のグループの発表も聞いて知識が増えた	4.83	4.79	4.86	4.71	4.80

表4 FS（留学生）の結果

	2008	2009	2010	2011	平均
JSと一緒にできたPWは楽しかった	4.41	4.05	4.78	4.50	4.44
いつもの授業とは異なることが学べた	4.41	4.14	4.50	4.44	4.37
JSから学ぶことがあった	3.74	4.14	4.45	3.94	4.07
短い期間だったが、できる限りの準備をして発表できた	3.85	3.57	4.30	3.69	3.85
他のグループの発表も聞いて知識が増えた	4.29	4.19	4.03	4.50	4.25

この結果から4年間を通して、JS、FS協働によるPWは双方にとって「楽しい」学習形態であり、それぞれの大学の授業で学んでいることとは異なることが学べる学習機会となっていることが窺える。特にJSの評価がFSより高い傾向が見られる。普段、留学生の少ない環境で学んでいるJSにとって、FSとの密度の濃い時間を過ごすこと自体が得難い体験であり、満足度の高さに繋がっているのではないかと推察される。また、「短い時間だったが、できる限りの準備をして発表できた」という項目については各年、他の項目と比べて低い傾向があり、JS、FSの間にほとんど差がない。3日間という限られた時間の中で成果を見せるPWであるが、よりよい発表を目指そうとする参加者がJS、FS双方に同じくらいの割合で存在していたことがわかる。

#### 4. 協働学習の観点からの考察

ここでは、PW終了後に参加者に対して行ったアンケートの自由記述及びインタビューから、PWを行って満足できた点、満足できなかった点についての代表的な意見を挙げ、協働学習の観点から考察していきたい。

##### 4. 1 満足できた点

###### A. 知識の増大

(例1) このプロジェクトはこれまでに中で一番楽しくて知識が得られた活動だったと思う。それは日本の教育について学んだり、日本人と一緒に努力したし、日本の文化や言語に関する理解を深めたりできたからだ。このようなプロジェクトをまたしたいと思う。(2010-FS)

(例2) 気になっていることを実際にインタビューで聞いて、事前に調べただけでは分からないことを得ることができた。(2008-JS)



(例3) 留学生の出身国のことがよくわかった。(2008-JS)

(例4) 留学生が分からない日本語を教えてあげたり、逆にこちらが英語を教えてもらったりして、お互いに知識を増やすことができた。(2008-JS)

協働PWを通して知識が深まったかどうかについては、アンケートの結果(表3、表4参照)においても、JS、FS両方で高い評価となっているが、「他のグループの発表も聞いて知識が増えた」という項目のアンケート結果では4年間を通して全てJSのほうが評価が高い。名古屋文化、日本の教育、名古屋の街といった日本を取り上げたテーマでありつつも、FSの視点から改めて日本を見つめなおしたり、訪れたことのない場所について新たな発見をしたり、FSの持つ言語文化について知識を得たりするなど、普段外国人と接することがほとんどないJSにとっては特に新鮮に感じられたのではないかと推察する。

## B. 友達作り

(例5) 仙台の友だちができて本当にうれしいです。日本人に日本の場所を初めて案内や紹介をしてあげるのは、面白くていい経験でした。(2010-FS)。

(例6) MG生と会えて本当にうれしく思う。それも仲良くできてとてもよかった。短い間だったけど、すごく親しくなれて長い間付き合い合っていたような気がする。言葉にできないほどとてもとても楽しかった。一緒に色々などころに行ったり、外食した記憶を大切にしたい。もう1つの宝物を手に入れたような気がする。(2010-FS)

(例7) 新しい友達を作って以前は知らなかったところが発見できて本当によかったと思います。仙台と名古屋の区別も習いました。(2011-FS)

(例8) 自分たちで調査に出向くことでグループ内の関係がとてよくなった。一緒にいる時間が長いことで仲良くなることができた。(2008-JS)

グループで作業をする中で、メンバー同士仲良くなりたい、友達になりたい、という思いを持つのは自然なことであり、多くの参加者がそうした希望を持ちこの協働PWに臨んでいるものと思われる。FSは既に名古屋において同じ大学の日本人の友人を持っていることが多いが、離れた土地、東北に新しい友人を持つことは視野を広げる大きな機会となっていることだろう。PWが終わった後、仙台へJSに会いに訪れるFSが毎年のように現れていることにも

触れておきたい。本PWがJSとFSの関係構築に大きな意味を持つことを示すものだと思う。

### C. 異文化交流

(例9) 日本人と一緒に交流できた。(2008-FS)

(例10) 日本人の学期は終わったのに、まだ日本人と話す機会があって嬉しい。(2010-FS)

(例11) 良かった点は、ほんとに私たちのことを大切にしてくれてるというか、自分たちの時間を削ってでも、私たちと御飯を食べたりとか、どこか連れて行ってくれたりとか。(2009-JS)

(例12) こういう機会は留学生が少ないMGではなかなかないですし、5日間という短い間でしたが一生の思い出になるほどいい旅行でした。また、世界各国の人とお話がたくさんできてまさしく異文化交流ができたと感じています。(2010-JS)

(例13) 留学生の方とたくさん話をしたことで、日本や日本語について改めて考えることがたくさんできました。普段の生活では決して体験できないことだったので、プロジェクトワークに参加し、成功させることができて良かったと思いました。(2011-JS)

異文化交流ができたことについてのコメントは、特にJSに目立った。FSは世界各国の留学生が集まるクラスにいて、日本人との交流も多く、異文化交流が日常的になっているのに対し、JSは普段なかなか留学生と交流することができない環境にいることが要因であると思われる。しかし、FSにとっても2月のこの時期は外国人留学生以外の授業が行われていないため、日本人学生との交流が極端に少ない時期である。そのため、「日本人の学期は終わったのに、また日本人と話す機会があって嬉しい」というコメントからもわかるように、協働PWが行われるこの期間はFSにとっても日本人との貴重な交流の時間となっているようである。また、FSはこれまでの授業においても日本人学生をゲストに呼ぶ授業や合同の授業を体験しているが、同じ日本人学生と3日間あるいは4日間一緒に過ごすという体験はしていないため、このような濃密な異文化交流の体験は初めてだという学生が多い。

#### D. 自分の不足点に対する気づき

(例14) 実践して、自分が足りない部分が掘り出せて（例えば、時間が有効利用できていないとか）よかったですと思います。また今回足りなかった点を次回の課題として頑張りたいと思います。(2010-FS)

(例15) 日本人は発表の仕方が下手だと言われているけど、本当にそう思う。でも、外国人と一緒に発表することで、自分も自分なりに楽しく分かりやすく発表しようと頑張れた。(2010-JS)

自分自身だけのことではなく、自分が所属するグループ、文化に対する気づきのとも言えるコメントも見られた。これらのコメントからは反省点を前向きに捉え、それを克服しようと努める姿勢が窺える。こうした姿勢は、他のメンバーとの相互作用の中で生まれたものではないかと推察する。

#### E. 対話の仕方に関する学び

(例16) 先生の授業でやった、高コンテキストと低コンテキストの違いってものを、肌で感じたというか。韓国では同じ文化圏というか、同じ考え方だったので全く苦労しなかったんですけど、やっぱり欧米の人とか、表現方法がちよっと日本人と違って直球だったりするので、それがきつくきこえたりすると、いざこざがおきやすいというか、そう思いました。(2009-JS)

(例17) ただ会話をするだけではなく「プロジェクトワークを成功させる」ということをしなければいけない中での会話や作業だったので、とても貴重な体験になった。コミュニケーションの取り方、わかりやすい日本語に直すということについて学べた。(2010-JS)

(例18) 結構やっぱりあっちの人と接するときには自分のこと言わなきゃいけないって今まで結構習ってきて、やっぱり、日本人とは違うから、自分がしたいことはちゃんと言わなきゃなって思いました。(2011-JS)

協働学習は「対話」を手段とし、「対話による共同構築のプロセス」を有するとされる。この対話の仕方については、「自分の意見をはっきり言う」ということ、「メンバー同士コミュニケーションを円滑にとれるように工夫する」ということ、「わかりやすい日本語で話す」ということについて、JSから多くのコメントがあった。特に、意見をはっきり言うということに関し

ては意識して行ったというJSが多い。異文化コミュニケーションに関する授業で欧米のコミュニケーション・スタイルと日本のそれとの違いについて学んでいたこともあり、意見の述べ方の違いを実感し、自らそれを実践しようと努力したJSが多かったようである。話し合いを活発に行う、コミュニケーションを多くとる、ということがタスクを遂行する上で非常に大事な点だと認識されていたのであろう。

#### F. 相手からの学び

(例19) 実際に日本人がどのように発表するかが見られてすごく勉強になった。(2011-FS)

(例20) 新しい単語や別の場所に住んでいる日本人の考え方を学んだ。(2011-FS)

(例21) 私は日本語学習者の方と話す機会がずっとなかったもので、こんな長い時間いろんなことを話して、すごく教えてくれるっていうか、説明もわかりやすく教えてくれて、私たちが教えるよりも教えてもらうことのほうがすごく多かった。(2009-JS)

(例22) 留学生の日本語の表現が間違っていたら厳しく教えてくださいと勉強熱心な姿に感化された。(2010-JS)

前述した表3、表4のアンケート結果における「JS/FSから学ぶことがあった」の項目の結果でも概ね両者の評価は高かったが、特にJSの評価が高い傾向が見られた。「C. 異文化交流」の箇所でも触れたが、JSが普段留学生など外国人と交流する機会が少ないこともこの結果との関連が深いものと推察できる。コメントにも見られるように、JSはFSから日本語を学ぶ態度、外国語である日本語を駆使して、様々なこと(国、言語、名古屋のこと、外国人として日本に暮らす難しさや楽しさなど)を教えてくれる、その積極性や前向きな態度などを学んだという声が多かった。一方、FSからはJSから日本語の他、日本文化のことや仙台のことなど会話を通して学んだという声の他、例に挙げたように、日本人の発表の仕方や作業を懸命に行おうとする姿勢を学んだという声が聞かれた。このような結果は、本PWが協働学習の互惠性という観点から見て、有効に機能していたことを示唆するものだと思われる。

## G. 適切な作業分担と協力

(例23) グループと一緒に協力してできるようになった。(2008-FS)

(例24) みんなが努力していいPWができた。(2008-FS)

(例25) それぞれの得意分野を生かすことができたかなと。私はHさんが作った原稿を読みながらおかしいと思ったところは校正して、一緒に構成を考えたりもしました。(2009-JS)

(例26) 発表はみんなすごい真剣に取り組んで、意見もうちのチームは言い合ってたので、こうしたほうがいいんじゃないかって、こっちのほうがいいんじゃないかっていう話はしたので。なんか、どっちかにまかせっきりじゃなくて、ほんとにグループでってできたので、良かったと思います。(2011-JS)

満足度として高いのは「メンバーが協力してできた」「得意分野を生かして分担してできた」というように、それぞれが役割を担って作業ができたグループの参加者たちであった。コメントはJSのほうにより具体的なものが見られ、「協力して作業をする」ということについては、JSの要求度、期待度がより高いのではないかと推察された。

## H. カードゲームで出たアイデアの実践

(例27) PWをどういうふうにしようかを楽しく考えることができたので、とても役立ったと思う。MG生とも話し始めるにもよかったと思う。(2009-FS)

(例28) カードゲームをやった時、みんなが協力することが必要だと意見を言った。そして実際にみんなよく協力できたのでよかった。(2009-FS)

(例29) 全員アメリカ人なので英語のほうが意思疎通しやすいはずだけれど、ギリギリまで英語は使わず、日本語を使おうと意識していて、英語はなるべく使わないでって、最初のゲームで言ってたんですよ。それが実践できた。(2009-JS)

(例30) 意外と自分の意見を言っても、気分悪くってというか、雰囲気悪くなることって全然ないから、これからもちよつと言ってもいいかなって思うようになりました。あの、カードでゲームとかしたじゃないですか。あれみたいに、質より量ってというか、いっぱい意見を言ったほうがいいかなって思うようになりました。(2011-JS)

PWにおける実地調査の前に行ったのが「ブレインストーミング促進用カードゲーム」である<sup>8</sup>（3.2参照）。このセッションは15分ほど行われ、「PWを成功させるにはどうしたらよいか」をテーマにメンバーがアイデアを出し合った。このカードゲームではアイデアを共有する過程において、アイデアを言った人の揚げ足を取るような行為を禁じる、「批判禁止」を最も重要なルールとしている。さらに、どんな些細なアイデア、意見でも述べてできる限りたくさんアイデア数を出すことを良しとする「質より量」の原則がある。こうした意見述べのスタイルをその後のPWの話し合いに生かせた、というコメントがあった。また、実際に出了たアイデアの中から、グループで実際に実践しようと決めたアイデアをそのまま生かすことができたというコメントもあった。これらはどちらも「E. 対話の仕方に関する学び」に繋がるものでもあり、協働学習の観点から見ても、対話への強い関心が窺えるものだと見えよう。

#### I. 共通点の発見

(例31) なんか、意外とみんな日本人ぽいってうか、こう、なんか、一緒に夜ごはんとか、結構用事があつて、留学生の方も忙しくて一緒に行けないこともあったんですけど、それでもなんか、ごめんね、行けなくてって何回も言ってくれたりとか。なんか日本人ぽい感じ？・・・なんか。すごい、気遣われてるなっていう感じがしました。なんか、ドライな感じっていうか、用事あるからじゃあねっていう感じになると思いました。そんな気遣ってくれたのは、嬉しかったですね。(2011-JS)

(例32) 生まれ、出身の国が違うから、考え方ももっと違うと思ってたんですけど、同じようなところもあって、なんか似てるんだなって。高い店じゃなくて、安い店に行きたいとか。ここだったら、もっと安い店に行こうよ、とか、感じのこととか、そんなに、なんか、もっとハイテンションなのかと思ったんですけど、すごい落ち着いてて。(2011-JS)

PW前に持っていた自身の外国人に対するイメージが変化した、というコメ

#### 【注】

<sup>8</sup>このカードゲームの活用法及び実践報告については澤邊・安井・西浦(2008)、澤邊・安井(2009, 2010)を参照されたい。

ントは主にJS側に見られた。「意外と自分たちと似ている」「共通している面がある」という新しい発見は自己のステレオタイプ的な見方を容容させ、好意的な感情で受け止められたようである。

#### 4. 2 満足できなかった点・困難だった点

##### A. 作業分担と協力

(例33) プロジェクトをするとき、なかなか皆 (JS) に手伝ってもらえなかったことは残念だったと思います。それ以外は、本当に良かった。(2010-FS)

(例34) 昨日最初のうちは何をしたらいいかわからなくて、留学生の方に任せてしまったので、パワーポイントの使い方とか覚えていればよかったかなと思いました。(2009-JS)

(例35) 全体でっていうのが、なかったかなって。パワーポイント作るときも個別になっちゃったし、話し合いも、個別だなあって。別々でやったかなって、思いますね。時間はかかるかもしれないけど、こういうと悪いかもしれないけど、一つのことをこれがいいんじゃないとかいいながら、パワーポイントもこういう文章入れたらいいんじゃない?とか、みんなで見ながら、効率悪いけど。もう少し時間があつたら、別々に作ってもみんなで見ながら発表の練習とかみんなでチェックしたりとかしたかったな。(2009-JS)

(例36) ほんとは練習したかったんですけど、(FSが)用事あるって言って、帰っちゃったんです。それはしょうがないなって思ったんですけど、一回練習できればよかったなって。ほとんどぶっつけ本番みたいな感じになっちゃったんで。そこはちゃんとできれば良かったなって。他のグループみると、ちゃんと協力してて。(2011-JS)

満足できなかった点、反省点としてJSから多く挙げられたのは、グループ間での作業分担、協力体制のことであった。4. 1で満足できた点として「G. 適切な作業分担と協力」を挙げたが、これが上手く行くと満足度が高まる。協働PWであるからこそ、「協力して頑張りたい」という思いは特にJSに強いように思われた。この理由については具体的な調査を行っていないが、FSの多くには最初から「グループで協力する」という概念自体があまりない可能性がある。そのため作業中、役割分担が明確に確認できなかったり、負担が一部に偏ってしまったり、個別の作業が多くなってしまったり、放課後、

メンバーが同じ時間に集まれずに全員での作業を続行できなかつたりすることがある。そのような場合にどう対処すべきか、メンバー間でどのような協力体制を作ることができるか、短期間のPWであるからこそ体制の立て直しは難しい点ではあるが、JSとFSの間で協働PWについての共通の認識を持つ必要性が感じられる。

#### B. テーマと計画に関する認識のズレ

(例37) 最初に分担を決めずにみんなそれぞれのやり方で進めてしまって、最後に、じゃあ、まとめどうする？っていうのはっきりしたイメージが私達の中で共有されてなかったの、それでちょっとズレができたかな。(2009-JS)  
 (例38) まず計画を立てるときに、自分たちが思っていたことと、たぶんあっちが考えていたこととちょっとずれてて、うまくいかなかった。それは聞けば、最初に聞けばよかったんですけど、それに、こう、気づけなかった。(2011-JS)

テーマと計画に関するJSとFS間の認識のズレは、前述の「作業分担と協力」に連なるものと言える。これはJS側に見られたコメントであるが、どちらもJSとFS間の考え方の「ズレ」に触れている。作業分担を決め、具体的な計画を立てる、そして協力してタスク遂行にあたる、という一連の流れにおいて、メンバー間の考え方にズレが生じていることに気が付いた場合、その時点でそれを修正しようとする姿勢の重要性を指摘しているものと思われる。

#### C. グループ間におけるコミュニケーション

(例39) お互いに気を遣いすぎてた部分もあったのかな、私も自分の意見をはっきり言えなかった部分もあったのかなと思って。そこは自分も意見をはっきり言って留学生の方に自分が思っていることを言えるような、そういう雰囲気を作ってあげたらよかったかなとちょっと思いました。(2009-JS)  
 (例40) 今回のプロジェクトワークで一番大変だったことは、コミュニケーションをとることです。単に日本語の能力の話だけではなく、文化が違うということも影響してこちらが言いたいことをわかってもらえなかつたり、留学生が伝えたいことをこちらがくみ取れなかつたり、悔しい思いをたくさんしました。(2010-JS)



(例41) もっと一緒に見て、ああだね、こうだね言えるような状況を作ればもっと良かったのかなって。一応、迎えてもらう側ですけど、ちょっと気遣っちゃったかな、こっちが。あっちも気を遣ってたと思うんですけど、こっちも逆に気を遣っちゃったかな。(2011-JS)

協働作業中にコミュニケーションに関わる葛藤を覚えた経験についてのコメントも主にJS側から挙げられた。互いに気を遣いすぎた、そのためはっきり意見が言えないことがあった、言葉だけでなく文化の違いによって十分に意思疎通ができなかった、などの内容であった。協働PWにおいて、言いたいことが互いに言い合える雰囲気作りは課題の一つと言える。

#### D. 日本語での意思伝達

(例42) やっぱり、(自分が) 日本語しかしゃべれないので、まだわからない日本語はいっぱいあって、それをうまく伝えられなかったり、そういうところが申し訳ないなと思いました。(2009-JS)

(例43) 相手が分からない日本語をより簡単な日本語にして説明するのが難しかったです。(2010-JS)

(例44) もっとちゃんとやれることがあったのに、すぐできなかつたりとか、したりして、あと、うまく説明、留学生に聞かれたこととかで説明できなかったこともあった。話し言葉、が多かったんですけど、なんか、うろうろ？うらうら？なんかそう、オノマトペがわからないって言われて。教えてほしいみたいに言われて。でも難しい。(2011-JS)

日本語を母語とするJSから日本語での意思疎通に関する難しさに関するコメントが多く出たのは、母語であるからこそ易しく言い換えたり、FSの視点に立って説明したりすることが難しいことを実感したためであると考えられる。

特に日本語教育を学んだ学生であるため、その意識はより高いのではないだろうか。協働PWでは日本語での対話が不可欠であるが、JSが身につけるべき対話のスキルとして、易しく言い換えたり、説明したりできるスキルを挙げることができる。

### E. 時間・場所の制約

(例45) もっとパワーポイントの準備の時間があっても良かったと思う。

(2011-FS)

(例46)面白かったけど、時間が足りないことがあって大変でした。(2010-FS)

(例47)まとめる時間が少なかつたため、発表原稿を充実させることができなかつた。最終的には満足できる発表であったが、もっとグループ内で打ち合わせをする時間が欲しかった。(2008-JS)

(例48)時間は全体的に足りないような、一番最後のまとめのところの時間が足りないかなと。ちょっとだけ足りないと思いました。皆さんのスケジュールの都合もあると思うんですけど。なかなか会えなかつたりとか。うちのグループは結構スムーズにいったんですけど、見ていてかわいそうなところもあつたり。(2009-JS)

JS、FS両者から時間と場所の制約によって思うようにPWを進められなかつた点が残念だったという声が聞かれた。一日目に調査、二日目に発表準備、三日目に発表という3日間集中のPWは、短期型だからこそ集中して頑張れるという利点もあるが、やはりじっくり時間をかけて作業を行いたいという声が多い。特にFSはそれぞれ授業スケジュールが異なっており、全員が集まって作業にあたる時間が限られるケースがある。しかし滞在時間が長くなれば、仙台から名古屋を訪問し、滞在しているJSの負担も多くなることから、こうした物理的な問題の解決は難しく、課題の一つとなっている。

### F. 積極的な態度

(例49)発表会で、JSからの質問があまりなかつたこと(が残念だった)。

(2008-FS)

(例50)どこ行きたいですかって聞かれても、自分どこ行きたいってちょっと言わなかつたので、そういうところで、あんまり積極的にはならなかつたので、ここがいい、みたいに言えたらよかつたなって思います。(2011-JS)

JSにもっと積極的になってほしいという意見はFS側から毎年のように聞かれる。日本語の運用面では有利に立つJSであるが、どの程度まで自分の意見を強く出してよいものか戸惑い、控えてしまう傾向があるように見受けられ

る。発表会においても聴衆からの質問の多くはFSから出て、JSからは出ないことが多い。こうした態度は普段の授業から活発な意見の交換をしているFS側から見ると、非常に消極的な姿勢に映るであろう。こうした姿勢・態度を改善することも課題と言える。

#### G. PWのテーマやメンバー構成

(例51) テーマがちょっとわかりにくい。グループの人と長い間迷った。(2008-FS)

(例52) 名古屋文化以外に、もっと深い話がしたい。(2008-FS)

(例) テーマには以前から興味があったのでもっと興味を持つことはできなかった。(2009-FS)

(例53) (名古屋に関する知識に関して) 6か月の中ですでに経験したことはわかりだった。(2009-FS)

(例54) 良くなかった点としては、最初全員男の子でどこにいったらいいかわからなかった。女の子が一人でもいたらコミュニケーションが取りやすかったと思う。(2009-JS)

(例55) (FSの) 2人がしゃべっていることがほとんどないから。留学生と私たち、2ペアが2つみたい。片方しゃべってるときは片方がずっと黙ってるって感じだったので、どうなのかなって、それが一番気になってたんですけど。(2011-JS)

テーマに関しては意図的に名古屋文化を取り入れるようにしていたが、必ずしも参加者はそれを求めているのではないかと思える指摘があった。テーマに関して満足できなかったというコメントは、主にFS側から出ている。既に何カ月間か名古屋に暮らしているFSにとっては、新しい発見を得にくいのかもしれない。また、文化や場所を紹介するような内容の発表の場合、深い考察には結び付きにくいという点も不満に繋がっていることが分かった。参加者の大部分を占めるような意見ではないが、こうした指摘はしっかり教師が受け止めるべきであろう。また、メンバー構成の方法に関しても、コミュニケーションの取りやすさに配慮した方法をさらに考える必要があるであろう。

## 5. まとめと今後の課題

以上、JSとFS間における協働PWを参加者のアンケート自由記述部分とインタビューの結果から「協働学習」という視点を中心に据えて考察してきた。その結果、本PWはJS、FS両者にとって密度の濃い異文化交流の場となり、テーマに関する知識の他、日本語・日本文化、異文化理解、JSにとっては日本語教育に関する知識や経験を増やし、JSとFS間の友好的関係構築にも役立つ、両者にとって互恵性のある活動である可能性が示唆された。特に普段外国人と接する機会の少ないJSにとってはFSから多くのことを学ぶことのできる貴重な機会となっていることが窺えた。

協働学習は対話を手段とし、対話のプロセスを経て新しい創造を目指すものであるということについては先に触れたが、参加者はこの対話による共同構築の過程で、様々な発見及び葛藤をしていることが分かった。その中の葛藤面については「4. 2 満足できなかった点・困難だった点」に示したが、これらは今後、教師が協働PWのデザインを行う際に検討が必要なものである。JS側は「一緒に協力して行う」ことへの期待が比較的高く、特に欧米系のFSに多く見られる傾向であるが、とかく個別になりがちな作業方法や計画に対するFSとの認識のズレに葛藤を覚える傾向があるようだ。短期集中型であるからこそ、こうしたズレが生じた場合の修復は時間的に困難な面は否定できないが、そこをどのように乗り越えるかを考え、行動に移すように促すことは大事なことだと思われる。その際には言いたいことをしっかり相手に伝える態度・姿勢が重要になってくるだろう。JS、FS両者にとって、対話の姿勢作り、雰囲気作り、そして言葉の調整などの運用能力も含めた対話のスキルを身につけることは協働PWを円滑に進めるために必要不可欠な要素である。協働PW自体がそのトレーニングの場となっているが、事前のトレーニング、シミュレーションも試す価値はあろう。

なお、PWをデザインする教師側に必要なこととして、他にもテーマの選択、メンバー構成の方法の検討、時間と場所の制約など物理的な問題の克服などが挙げられた。今後、大学生が取り組むにふさわしい深い考察を伴うテーマの選択やテーマに関心を持つメンバーの構成の在り方により配慮をし、十分にコミュニケーションが取れる時間、場所を確保していくことも課題としていきたい。

## 【参考文献】

- (1) 池田玲子・館岡洋子 (2007) 『ピア・ラーニング入門－創造的な学びのデザインのために』 ひつじ書房
- (2) 板倉ひろこ・中島祥子 (2001) 「IT時代における日本語教育－香港・鹿児島間の電子メール双方向型プロジェクトワークの試み－」 『世界の日本語教育<日本語教育事情報告編>』 6, 227-240
- (3) 稲葉みどり (1994) 「プロジェクト・ワーク実施上の問題点と課題－日本語中級における「テレビのニュース番組制作」」 『名古屋大学 人文科学研究』 第23号, 123-141
- (4) 梅田康子 (2006) 「日本語予備教育における内容重視型日本語教育の試み－留学生別科における『日本事情』に関する一考察－」 『言語と文化』 15 愛知大学, 59-78
- (5) 倉八順子 (1994) 「プロジェクトワークが学習成果に及ぼす効果と学習者の適性との関連」 『日本語教育』 83, 136-147
- (6) 澤邊裕子・安井朱美・西浦和樹 (2008) 「ブレインストーミング促進用カードゲームを使用した日本語学習活動の可能性」 『WEB版日本語教育学会実践研究フォーラム報告』
- (7) 澤邊裕子・安井朱美 (2009) 「ブレインストーミングを促進するカードゲームの活用とその改善－日本語教育現場での活用法－」 『WEB版日本語教育学会実践研究フォーラム報告』
- (8) 澤邊裕子・安井朱美 (2010) 「ブレインストーミング法を取り入れたカードゲーム教材『IDEA CARD』」 『2010年度日本語教育学会秋季大会予稿集』
- (9) 田中信之 (2000) 「留学生別科における日本事情教育」 『北陸大学紀要』 24, 339-345
- (10) バルタン田中幸子・猪先保子・工藤節子 (1988) 『コミュニケーション重視の学習活動1 プロジェクトワーク』 凡人社